

省略現象の対照分析に向けて—現状と今後の課題

尹 盛 熙*

Toward a Contrastive Analysis of Ellipsis—Current Status and Issues to be Addressed

Sunghee YOUN

要旨：本稿では、「省略」という現象の総合的な対照分析を視野に、現象の概要と分析の流れを概観する。省略が言語学の諸分野でどのように扱われてきたか、具体的にどのような現象がその範囲に含まれるかなどを紹介し、どのような視点が求められるかを踏まえ、今後の課題と対照分析における意義を展望する。

Abstract :

This paper aims to introduce ‘ellipsis’, a part of a universal language behavior of omitting some elements to be brief and concise in written and spoken utterances. It can be considered as a useful tactic to maintain efficiency of communication, which can be achieved by reducing and encapsulating words to make a shorter utterance that contains more information. A number of related phenomena have been researched across the diverse field of linguistics. However, few unified approaches to various data have been provided. This is attributed in part to general indeterminacy of how to pin down the concept of ellipsis, as well as to less enthusiasm for analyzing syntactically incomplete sentences or phrases, lacking some potential elements of the expected whole. In light of the widely recognized need for efficiency of communication, further research is required. Although the various phenomena in each linguistic level of word/phrase/sentence/context show a certain level of universality, such as the tendency of function words to be easily omitted as opposed to content words, each language employs different strategies in the reduction of text. As it can be easily assumed that this phenomenon would be affected by structural features of each language, a cross-linguistically contrastive approach is important.

キーワード：省略、圧縮度、情報伝達の効率

1. はじめに

一般的に言語における「省略」は、繰り返しになる情報や、あえて言語化しなくても文脈などの他の要素から伝わると判断したものは省くなど、なるべく効率のよいやり方で、意図したメッセージを相手に伝えようとする行為として認識され

る。これは話し言葉・書き言葉を問わず頻繁に観察される現象であるが、何かが省略されているかどうかを判断することは、思いのほか容易ではなく、現象の範囲や概念を明確に規定するのは難しいとされてきた。

例えば「コート、かけた？」という質問の発話を例にとると、想定される完全な文構造を基準に

*関西学院大学国際学部准教授

し、助詞「(コート)は/を」や、疑問の終助詞「(かけた)か」などが省かれていると判断することは可能である。しかし、「～に」というふうにかける場所を示す成分や、「～が」などで記される主語がぬけていると判断する人もいるだろう。さらに、この発話の状況によっては「いつ」「どこで」などの付随的な情報が省かれている可能性も排除できない、というふうに広げていくと切りがなく、どこまでを省略の範囲とするべきかは明確に規定しにくいことになる。

即ち、「何か省かれている」という直感働くかもしれないが、何を客観的な基準としてそれを「省略」とするかは、判断があいまいになる場合も少なくないのである。そもそも人間が頭の中にあることをすべて発話にしているわけではないと考えると、突き詰めれば「総ての文は省略文」という意見にもうなづける¹⁾。頻繁に見られる現象でありながらも基本的な概念を定義することが容易ではない点は、この現象の研究を困難にしている一つの要因であると考えられる。

本稿は、このような省略現象の捉えにくい性質を踏まえた上で、それが持つ言語的な意義を今一度考えることから始め、この現象が言語学の諸分野でどのように扱われてきたかを概観するとともに今後の課題を展望することを目的とする。議論を進める上で本稿における「省略」の概念は、母語話者の直感から規範的に想定される完全な形式から欠落した要素がある場合として暫定的に定義しておく。

2. 現象の意義と従来への分析

言語によるコミュニケーションには様々な要因が関わると考えられるが、普遍的なものとして、ある種の経済的動機が働くことは確かだろう。即ち、言語行動における労力の消耗を抑えるという単純明快な動機である。このような省エネルギーの志向は、最小の労力で最大の情報を伝えるという「効率のよい情報伝達」につながるが、基本的に次の二つの方向で実現できる。一つは単純に発

話の長さを減らすことであり、もう一つは言語単位当たりの情報量を増やすことである。その両方を実現するために、なるべく長さを短かくして多くの情報を詰め込むような言語形式を作ることは、コミュニケーションの効率を高める上で極めて有効な手段となる。いうなれば「圧縮度の高い」形式を作るということであるが、新聞見出しや翻訳字幕など、限られたスペースで様々な情報を伝えなければならないようなテキストがその代表例として挙げられる。

そのような形式を作り出す上では、まず、何らかの理由で「言語化の必要なし」と判断したものは省く作業と、省かずに残した情報を、該当言語において適切な形式としてまとめあげる作業が行われることになる。前者は情報の取捨選択に関わる問題で、後者は言語化の際にどのような構造・形式を取るか、という問題であり、これまで「省略」と考えられてきたものは前者に当たるというイメージが強いが、後者にも深い関わりを持つ²⁾。

省略は、発話の中から何かを切り取って短くするといった単純な傾向を示すというよりは、複数の要素との関わりの中で、現象ごとに異なる様相を見せる。これは、省略現象が単体で終わらず、他の現象と連動して起きることからも明らかである。例えば省略が起きると、省略前の形式にはなかった新しい意味・機能を担うことがあるが、これは省かれた情報の欠落を埋める補完的な手段が働くということの意味する。その点を考慮すれば、省略という現象は、単発の言語現象としてではなくコミュニケーションにおける情報伝達の効率化という大きな志向性の下で行われる戦略的行動の一部として、構造的に捉えられるべきものである。

さらに省略の様相は、特に形式的な側面を考えた場合、個別言語の意味的、構造的特性に大きく影響されるものと容易に予測できる。何か省かれた不完全な文章といえど、母語話者の直感に照らして許容しやすいものとそうでないものの区分

1) 大塚高信 (1938) 『英文法論考－批判と実践』 研究社。

2) 情報内容の取捨選択には、言語外の要素が多く関わるのが予想されるため、本稿では便宜上、どのような形式で圧縮度の高さが実現されるのかという側面に集中して議論を進める。

は行われるはずだからである。実際、共通点が多いとされる日本語と韓国語においては、略語の作り方や、圧縮度の高い新聞見出し及び翻訳字幕テキストにおいて文体などに相違点が見られる。従って、圧縮度の高い言語形式と、それを実現する一つの過程としての省略の諸相や連動する現象を観察し、その様子を日本語や韓国語、英語などといった個別言語の構造的特性と結び付けて考察することは、対照言語学的研究にはもちろん、言語一般における省略の機能や役割を究明することにも資するものと考えられる。

とはいうものの、従来の研究では、省略に関わる有意義な個別現象を指摘するものは多いが、圧縮度の高い形式に関する統括的な分析や対照言語学的視点からのアプローチは、管見の限り、多くはないようである。関連現象を示す用語の使い方に関しても、「省略」を始め、「削除」「縮約」「凝縮」「圧縮」「凝縮化」「要約化」「簡略化」など、類似した用語が用いられているが、各用語が表す現象の範囲は必ずしも一致するわけではない。

頻繁に見られる現象でありながらも統合的なアプローチが少なかったのは、すでに指摘したような概念規定の難しさに加え、言語学の方法論の性質にも原因があるだろう。即ち、文章や発話における文法的な適格性を基準に、非文法的な文をもたらす要素を見出すことを分析の手法とするような流れにおいては、何かの成分が欠落した文は「不完全なもの」と見られ、相対的に注目されなかったように考えられる。しかし実際に見られる文は、いわば完璧な文章のみならず、規範的文法に照らせば「非文」または「誤用」とされるような例も多いのは看過できないことであり、省略の諸現象を分析することは、言語生活の実態をよりの確に反映した研究につながると考えられる。

これまでに省略関連の現象は、統語論や形態論、語用論、情報処理など複数の分野で取り上げられてきた。文脈から欠落情報を推測できるという特徴から、談話レベルの現象として取り上げる試みが見られる。例えば久野(1978)は、「省略される要素は復元可能でなければならない」「新情報より旧情報が先に省略される」という原則を、談話における省略の根本原則として挙げてい

る。英語の省略現象に関するものとしては、現象の全般的な特徴とそれがもたらす文体のスタイルに焦点を当てた Wilson (2000) などが挙げられる。

統語論においては、主に英語を中心として文の統語構造における特定の成分の省略に関する分析が提示され、省略の起きる範囲が当該の文を超えないような場合が中心となっているものが多い。また分析の主眼点も、省略前の基底構造からどのような規則を適用して表層構造を導き出すかを明らかにすることにおかれており (Merchant 2004)、省略が行われた動機や、省略前の形式と省略後の形式における意味的な違いなどについての分析は、相対的に少ない。

また形態論においては語彙レベルの音節省略や略語などのテーマが注目されてきたし、文章内で繰り返して登場する語句の縮約された形式を分析するもの (石井 2007) があり、特定ジャンルのテキストに関する分析では映画の翻訳字幕や新聞見出しなど、明確なルールの下で省略が行われるものを対象に省略の行われた方式を観察した研究が複数ある (小林 2000、野口 2002)。また、情報処理の分野においては、圧縮度の高い形式の機械的な処理または作成を目的とする実質的な研究が行われてきており、要約文の解析・翻訳または自動生成などの機械処理のアルゴリズムを考案するといったものが見られる (山本他 2005)。

3. 言語の各レベルにおける省略現象

省略現象は、言語の単位である「語」「句」「文」「談話」の各レベルで観察される。以下に日本語の例を挙げながら、代表的な現象とその分析上の意義などを紹介していく。

①語レベルの現象

まず語のレベルで起きる現象として代表的なものは、略語である。

- (1) a. 日本経済団体連合会→経団連
- b. 安全保障→安保
- c. やっぱり→やっぱ
- d. ていうか→てか

- e. ハズかしい→ハズい
- f. さむい→さむ

まず (1a) に見られるように、日常または特定の場面で頻繁に用いられる固有名詞が便宜上短くなるという例は多い。使用頻度の高い語彙を短くするという現象は一般名詞でも観察される (1b)。また特定の語種で規則的に見られることもあり、(1e) (1f) のイ形容詞における一部の音節の省略がその例である。

そして、2つ以上の成分で形成される複合語においては各成分の最初の2モーラずつの音を組み合わせるとして略語として用いるということも頻繁である。

- (2) a. 卒業：論文→そつ：ろん
- b. まつ毛：エクステンション→まつ：エク

(2a) は「卒業 (そつぎょう)」と「論文 (ろんぶん)」からそれぞれ下線部分をつなぎ合わせて「そつろん」という形にするという例であるが、このような略語は漢語に限るわけではなく、(2b) で見られるように構成成分の語種を問わず生産的に作られる³⁾。

また、インターネットなどの特定の空間や、若者集団など特定のグループで用いられる隠語などにも、省略が働いた略語が用いられることがある。この種の省略形は、その使用において経済性の追求以外にも様々な要因が関わっていることが指摘されており、それらの要因を精査することは、省略現象の全体像を把握する上で必要と考えられる。

②句・文レベルの現象

句のレベルで起きる省略としては、名詞句における助詞の省略などを挙げることができるだろう。

- (3) 情報の共有→情報：共有

このような形式は、経済性が重視される新聞見出しに頻繁に見られ、簡潔かつ明確な書き方が要求される学術書籍などにおいても活用される。

- (4) a. あんた、何してるの？
- b. 宿題。

また (4) のように話し言葉で頻繁に見られる格助詞の省略も、この範疇に属すると言えるだろう⁴⁾。

一方、文レベルにおいては、主語や目的語といった文成分が省略されるような現象が従来の分析においても注目されてきた。

- (5) a. 電話はかけてみたの？
- b. 30分前にかけたよ。

(5a) の質問に対する答えとして (5b) のように返す場合、(5b) の方では述語「かける」の目的語に該当する「電話を」が省かれていると考えられる。このように文レベルで規定されるような、文の中で特定の役割を担当する句が省かれた例である。

また、文レベルで現れる様々な統語的要素が省かれることもある。

- (6) a. これはあなたの仕事。さっさとやる！
- b. 大雨で山間部に土砂崩れ発生

(6a) は与えられた仕事をこなすように促す文脈の発話で、「あなたの仕事でしょう。さっさとやりなさい」くらいの意味あいがあると解釈できる。「仕事」というふうに名詞が文の述語として位置する場合、通常はコピュラ「である／だ」が続くことによって名詞述語文としての体裁を整えることになる。しかし (6a) の最初の文では、コピュラ「である／だ」や、それに続くモダリテ

3) 単語ではないが、「あけましておめでとうございます」という挨拶などの定形表現も、話し言葉で「あけ：おめ」と2モーラずつに縮められることがある。

4) 格助詞の省略は、文レベルで起きると考えることも可能である。

イ形式がぬけており、次の「さっさとやる」においても、「～(やり) なさい」「～(や) れ」など、命令の活用形が省かれていると想定できる。(6b) は新聞見出しでよく見られる形式だが、「(土砂崩れが) 発生した」という過去の出来事の情報伝えるのに、「発生」という単語のみを用いている。「発生」はいわゆるサ変動詞の語幹で、動詞として振る舞う場合は形式動詞「する」を伴うが、この例ではそれが用いられておらず、それに付随する過去の時制(テンス)を示す形式も欠落しているわけである。

(6) で省略されたコピュラや形式動詞、テンス、モダリティなどの統語的要素は、実質的な意味内容を持たないが文法的な役割を果たす「機能語」と言われるものである。機能語は、実質的な指示対象を持つ実質語に比べて省略されやすく、おそらくこれは言語普遍的な傾向であると考えられるが⁵⁾、個別言語においては異なる様相を示すことが明らかになっている。例えば日本語の「まもなく東京駅に到着です」といった、形式動詞「する」の省かれて「到着」にコピュラの「です」がついた名詞述語文の場合、同じ形式の韓国語文は許容度が低いことが指摘されている⁶⁾。さらに日本語の場合、「いつからそこに?」「～いたのか」の意)といったように、実質語としての意味が薄く、形式動詞に近い述語が省かれる例が韓国語に比べて多いことが指摘されている⁷⁾。

③ 談話レベルの現象

談話のレベルでは、文章単位の省略が行われることが想定される。例えば Wilson (2000) が「状況的省略 (situational ellipsis)」としている現象は、文章単位の省略が行われたものであるとみなすことができる。

(7) I wouldn't (), if I were you. (Wilson 2000)

(7) は西部劇映画などでガンマン 2 人が対峙している状態で片方が銃を落としてしまい、手を伸ばして取ろうかとしているときに、もう一方から「やめておけ」という意味合いの警告として発せられたものである。ここで上記発話の省略部分である () は、先行文脈からではなく、画面上で展開される状況、即ち映像などの非言語的情報からしか復元できないとしている (Wilson 2000)。さらにこの文は、先行文脈になるべき発話を何も行っていない相手に向けて発せられたものであるという点から、先行文そのものが省略されたものとみなすこともできる。

さらに以下のようなやり取りも、談話において文章が省略された例であると考えられる。

- (8) a. 時計、持ってる?
b. (うん)
a': (いま何時?)
b': 3 時だよ。

(8a) の「時計を持っているか」は「はい/いいえ」で答えられる質問であるが、これに対する答え (8b) と、それに続くべき質問 (と考えられるもの) である (8a') を省き、これに対する答えを返すというやりとりが行われている。これは、省略というふうには判断するための明示的な根拠がない例ではあるが⁸⁾、おそらく (8b) のように答えられるだけで終わったら、(8a) の発話者は戸惑うことになるだろう。

上記に挙げた各レベルにおける現象の他にも、音声的な理由で経済性が実現される例がある。例えば「～です」の最後の「す」の発音が「su」で

5) コピュラやモダリティなどの省略は英語でも見られる上に、接触言語であるピジンやクレオールでは、全般的に機能語が少ないことが文法上の特徴として指摘されている。

6) 井上優・金河守 (1998). 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書－日本語と韓国語の場合」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト平成 10 年度 (II) 研究報告書』, 455-470.

7) 尹盛熙 (2016). 「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現－韓国語との対照分析」『社会言語科学』18 巻 2 号. さらに、「初めて出会った時のことを?」「～覚えているか」の意味) などのように、実質語としての述語が省略される例も韓国語に比べて頻繁に観察される。

8) Wilson (2000) はこれを「inferential gaps」とし、省略 (ellipsis) には含まれないものとして規定している。

はなく母音の脱落した「s」になったり、「ありがとうございます」が話し言葉などで「あざっす」になるような現象も、省略現象の範囲に入ると言えるだろう。

4. テーマ発展のための課題

省略という行為とそれによって実現する圧縮的な形式には、様々な要因が関わるとされる。従って今後、このテーマに関する研究は、多様な現象を多様な視点から観察し、言語学のみならず隣接した関連分野、特にコミュニケーション研究の中に位置づけられるような、学際的なアプローチが必要となると考えられる。このテーマにおける統合的な分析を進める上で、今後取り組むべき課題は以下の通りである。

①概念及び分析対象の規定

省略は、その概念をどう規定するかによって研究対象の範囲にも幅が出る。これまで見てきたように、聞き手が「何らかの言語化されていない要素がある」という印象を受けるような発話は、日常生活の中で頻繁に行われているが、どこまでを省略とするかは容易には決まらない。従来の分析で取り上げられた現象や前節で紹介した言語の各レベルにおける諸現象を、何らかの統一した基準でとらえ直し、再検討する作業は有意義な出発点になるものと考えられる。

②省略が関わる言語現象の整理

言語の諸現象の中で省略が直接的・間接的に関わるような現象を特定することも、省略の動機として「経済性」以外の要因を把握する上で、重要であると考えられる。

また、言語の変化において一つの有意義な方向性は、「簡便になる」ということである。より発音しやすい方向、またはより短い形式になる方向へ進むことは、すでに指摘されている言語変化からも観察できることであり、そのような現象において省略形は、省略される前の原形とは異なる意

味機能を持つ場合もある。例えば「ら抜き言葉」の場合、受身と可能という二つの意味機能を持っていた形式「～られる」が短くなった「～れる」は、受身の意味は表さない。また、接続詞「だから」の口語上の縮約形である「だか」は、原形が持つ本来の意味機能である因果関係を表さないような文脈で、より頻繁に用いられることも指摘されている⁹⁾。

③様々なテキストデータの収集

省略が頻繁に行われるテキスト、即ち字数制限といった何らかの制約が働くテキストは、新聞見出しや翻訳字幕を始め、新幹線の車内ニュース、新聞記事・テレビニュース、広告のコピーや標語など、公共性の高いものから、メモ書きや携帯電話などのテキストメッセージ、SNS やインターネット掲示板への書き込みなど個人的なものまで、幅広い。これらは日常的に頻繁に接する類のものであるが、分析の材料として取り上げるためには、統一的な基準に基づいてデータを整理及び収集するという作業が求められる。

またこのテキストの中には、新聞見出しや記事などのように消極的な理解が要求されるものもあるが、メモ書きやテキストメッセージのように積極的な活用能力が必要なものもある。特に留学生など、該当言語の学習者にとって省略文を作る能力は、ノートを取るなどの基本的な修学活動にも関わるものであるため、上記のようなテキストデータの収集と分析は、外国語教育においても重要な意義を持つものと考えられる。

④明示的な省略現象・資料の分析

省略は話し言葉・書き言葉を問わず様々なテキストで行われるものであるが、一般的な談話においては決まったルールがあるわけでも、またそれが強制されるわけでもなく、談話が行われる場面に合わせて話し手（書き手）が行うのが普通である。しかし、中には上記の新聞見出しや翻訳字幕のように、特に強い時間的・空間的制約の下で、

9) 原田幸一 (2012) 「首都圏若年層の日常会話における「だから」の縮約形」『社会言語科学』第15巻第1号, p 57-72.

明確なルールによって省略が行われる場合もある。

すでに述べた通り、具体的に何が「省略」されているかを実際に特定することは難しく、あくまでも聞き手側が推測に依存して解釈することになる。従来の分析においても、省略された情報の「復元」を仮定することがあるが、無論、任意での復元には限界があり、不確かな復元情報を前提に議論をしても、その正確性を保証することはできない。省略前の状態を確認する方法がないまま、「何を省いて何を残し、最終的にパッケージとしてまとめあげるのか」というプロセスの問題を考えることは難しく、より踏み込んだ議論に発展しにくい恐れがある。そのため、最初に省略前の形式が明確に示されている上記のような資料を分析する作業が必要となる。

現象の全体像を把握するためには、まず出発点となる分析対象を決め、そこから現象の範囲を拡大しつつ、段階的に分析を進めていくことが求められる。そのためには、省略前の状態が明示的に特定できる資料の分析は有意義な作業になると考えられる。

⑤複数の言語における比較検討と対照分析

省略の分析から得られる結果は、個別言語の諸分野でこれまで行われてきた研究成果、そして対照分析の成果などから分かっている事実と関連付けて検討する作業が必要である。

各言語には、一般的に文の成立に重要とされる要素がある。例えば日米における語用論的な制約について指摘した井出・植野（2012）は、コンテキストにおける視点の違いを論ずる中で、以下のような例文を挙げて日英の違いに触れている。

- (9) a. 高等学校の学生さんよ。
b. He is a high school boy.

(9) は川端康成の『伊豆の踊子』からの文とそれに該当する英訳文である。(9 a) の日本語発話

には主語やコピュラのないが、相手や場面への配慮を示す要素である「さん」「よ」が示されており、一方で英語の訳文は「発話事象を客観的にとらえ、命題のみを過不足なく伝える発話」とであると指摘する¹⁰⁾。これは、英語では主語やコピュラ、冠詞などの文法的制約を満たすことが重要であり、日本語では相手への配慮を示すことが重要であるということになるが、日本語でも配慮を示すモダリティなどの要素を欠く文章は多く見られる。さらに主語が文法的な必須要素とされる英語でも、話し言葉では日本語のように省略されたり、コピュラやモダリティなどが省かれることは頻繁に見られ (A: What is Liam doing? B: (Liam is) singing in the band. (Halliday & Hasan 1976))、これは日記や新聞見出しなどの一部の書き言葉にも見られる現象である。英語においても日本語同様、文法的に不完全な形式を作る場合が省略現象によって起こることを踏まえ、省略という特定の現象を基準にした個別言語の対照分析を行うことにより、類型論的に有意義な結果が見られる可能性も期待できるだろう。

5. ま と め

本稿では、省略という現象を情報伝達の効率性を実現するための「圧縮度の高い形式」を作る過程として位置づけ、現象におけるこれまでの流れと各レベルにおける諸現象の概略を紹介した。その上で、今後このテーマ全体の発展に向けて有意義と考えられる課題をいくつか挙げ、その意義も合わせて指摘した。

文の上で必須とされる要素がある一方、それが省かれる例も存在するという矛盾した事実に対しては、整合性のある説明が求められるだろう。必須とされながらも省かれるのは何故か、どのような時に省かれるか、また何かが省かれた文は省かれる前の文とはどのような異なる意味合いや機能を持つか、さらに個別言語ではどのような共通点と相違点が見られるか、それは個別言語の特徴とはどのような関わりがあるのかなど、関連する多

10) 井出祥子・植野貴志子 (2012). 「場の理論で考える配慮言語行動」『「配慮」はどのように示されるか』(三宅和子・野田尚史・生越直樹編) ひつじ書房

くの問題を考えていく必要がある。

参考文献

- 石井正彦 (2007). 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房.
樺島忠夫 (1979). 『日本語のスタイルブック』 大修館書店
久野暲 (1978). 『談話の文法』 大修館書店.
小林敏彦 (2000). 「洋画の字幕翻訳の特徴とその類型」『小樽商科大学人文研究』 100, 27-82.
高橋太郎 (1993). 「省略によってできた述語形式」『日本語学』 12(10), 18-26.
野口崇子 (2002). 「見出し」の文法——解読への手引

- きと諸問題」『講座日本語教育』 38, 94-124.
山本和英・池田諭史・大橋一輝 (2005). 「新幹線要約」のための文末の整形」『自然言語処理』 Vol.12, No.6, 85-111.
尹盛熙 (2015). 「新聞見出しにおける日韓の省略と縮約—形式的違いを中心に—」『日本学報』 第104輯, 33-50.
Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
Merchant, Jason (2004). Fragments and Ellipsis, *Linguistics and Philosophy*, 27, 661-738.
Wilson, Peter (2000). *Mind the Gap: Ellipsis and Stylistic Variation in Spoken and Written English*. Harlow, Essex: Pearson Education.